

#### 4 「仏教を学ぶ」「仏法を聞く」ということは、「鏡を見る」に近い

仏法を聞いたときに「仏さまの教えはこんな教えなのか」と客観的に教えの内容を理解しただけでは、仏法を聞いたとは言えない。仏法とは、聞けば聞くほど自分の姿が見えてくる教え。

#### 5 教えの鏡によって明らかにされる私たちの姿

自己中心的な生き方であつたり、欲にまみれ、自分の思いを握りしめ、腹を立てたり憎んだり。つながりや関係の中で、互いに支え合いながら生きているにもかかわらず、そのことが分からぬまま迷い続ける私の姿が照らし出されるから。ただそこに「罪惡深重煩惱熾盛の衆生」を「必ず救う」とお誓い下さった阿弥陀仏の本願のお目当では當に私であった、救われなければ助からない私であったと気づかされる。

そして同時に、そのような私が、このときこの瞬間、生かされていることがただ事ではないのだと知らされてくる。私たちは既にして自分の思慮分別を超え、無量なるいのちによって生かされている。それはお念佛となって私たち一人一人に届けられている。

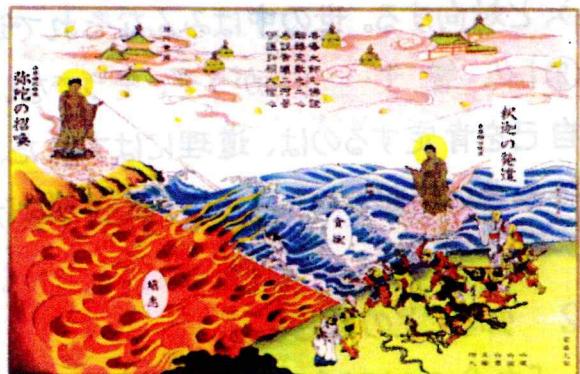
#### 6 「二河白道の譬え」とは

この譬えは貪瞋(とんじん)二河の譬喻(ひゆ)ともいわれ、浄土往生を願う衆生が、信を得て浄土に至るまでを譬喻によって表したもの。

ある人が西に向かって独り進んで行くと、無人の原野に忽然(こつねん)として水・火の二河に出会う。火の河は南に、水の河は北に、河の幅はそれぞれわずかに百歩ほど(50~60メートル)であるが、深くて底なく、また南北に辺はない。ただ中間に一筋の白道があるばかりだが、幅四五寸(12センチ~15センチ)で水・火が常に押し寄せている。そこへ後方・南北より群賊・悪獸が殺そくと迫ってくる。

このように往くも還るも止まるも死を免れえない(三定死(さんじょうし))。しかし思い切って白道を進んで行こうと思った時、東の岸より「この道をたずねて行け」と勧める声(發遣)が、また西の岸より「直ちに来れ、我よく汝を護らん」と呼ぶ声(招喚)がする。

東岸の群賊たちは危険だから戻れと誘うが顧みず、一心に疑いなく進むと西岸に到達し、諸難を離れ善友(ぜんぬ)と相見えることができたという。



法語1 悲しきかな、愚癡鷲、愛欲の広海に沈没し、名利の太山に迷惑して、定聚の数に入ることを喜ばず、真証の証に近づくことを快しまざることを、恥すべし、傷むべし  
(親鸞『教行信証』「信卷」)